

## 僕が自慢の、唯一の家事

食後にはいつも、自分の食器をめいめいが台所のシンクの脇に置いて片付ける。

そこからが、いつからか僕の定番となっている。

積みあがった食器を水に浸すだけのことだが、お椀やお皿のひとつひとつの汚れを水でざっと洗い落としながら、食器の形状ごとにまとめ、大きな器から小さな器へ下から順ぐりに、シンクに積み上げてゆく。

実に単純な作業だが、食器洗浄機を備えていない我が家にとって、その後の洗ったり乾かしたりする手順を考慮にしたこうした配慮が大事なはずで、僕はそれをひそかに「ささやかな気配りのある自慢」にしていた。

それが通じたのか、その行為が暗黙の内に僕の担当というか役割のようになったのだ。

僕が存在感を示せる、唯一の家事である。

.....

ある夕食後の、大分時間が経ってからのことだった。

茶碗がひとつ、水に漬け忘れてポツンと取り残されているのに、妻が気付いた。

妻がひとこと、これ、どうしたの？と僕に糺す。

思わず僕は、ア、ゴメンと言ってしまっそうになって、待てよ？（それまでの「ささやかな・・・自慢」をすっかり忘れて）何で僕が謝らなければならぬんだ。僕がどうして糺されなければならぬ？ひどく情けない気分になったところで、

ハッとした。

決して笑えない「本当の情けなさ」を突き付けられていたこと

に、気付いたのだった。

何のことかというと、

小学校以来親友のS君。

奥方が不調をきたした時のこと、彼が料理を筆頭に掃除など家事のすべてを行ったそうである。一日やふつかの話でない、かなり長期に亘ってのことだったと聞く。それを妻に話してしまつたところ、感心すると同時に、えも言えぬ目が僕に向けられていたのであつた。

もともと彼は独身時代も自分で料理することもあつたと聞いたことがある。こういうことは、軽々に妻には言つてはいけない、口の締まりに気を付けたいと思つたものだ。

もう一件ある。

やはり小学校以来親友の、I君。同じように、彼の奥方が具合の悪い時期があつたそうだ。

その彼も、台所に立つたり、家事の全般をこなしたという。この件も、うっかり話してしまつて後の祭りとなつてしまつた。

.....

いずれも、「皆さんやっぱり、体調を崩す年齢なんだね」と、ただそれだけの趣旨を伝えようとした話なのだが、そこには、元気で頑丈な連れ添いに、日常生活のすべてを頼り切つた脳天気な亭主が居たのだった。